

中国に伝存の日本関係典籍と文化財の調査報告

——大連、瀋陽、青島、北京の場合——

田 桓

桐蔭横浜大学

世紀交代の2000年春、要請に応じて日文研では科学研究費補助金基盤研究（A）（2）の交付を受け、私は「明治期に中国へ流出した日本寺院旧蔵文書に関する総合的研究」というテーマの研究分担者として、当プロジェクト3年目の研究調査活動に参加した。2000年8月4日～8月15日の12日間、中国の大連、瀋陽、青島、北京など四つの大都市に赴いて調査を行った。その調査の準備、プロセス、所見、結果、問題点など諸事項について報告する。

一 調査目的と意義についての認識

私は長い間日本の歴史と現状を研究しているうちに中日両国の関係と文化交流に対して特別な興味を持つようになった。中日両国の文化交流は世界文化交流史において特殊な地位を占めていることと思う。中国古代文明の日本古代社会発展への影響についてはすでに周知のことはいうまでもない。近代になって両国関係が不幸な時代に入っても両国の民間交流は中絶しなかった。しかも欧米側の近代化の経験と革命思想などが日本を通じて中国に伝えられたことも事実である。こういう立場でみると日本は中国と西洋との文化交流において掛け橋の役割を果たしたともいえる。

中国に伝存の日本関係典籍と文化財の調査研究というプロジェクトは一つの側面から数千年にわたる中日文化交流の裏付けを検証する事業であると思う。とりわけ中日文化交流に関心を持つ私は積極的に当研究活動に参加したことはいうまでもない。

二 調査の考え方とやり方

このプロジェクトの調査は両国の歴史関係に影響されると思う。古代の中日関係は平等、友好関係のもとで文化交流を行ったが、近代になってからは、日本の軍閥が中国を侵略し、両国関係が対立と不幸の時代となったため被害者として加害者に対する批判態度を持たざるをえないのである。特に近年日本の少数の政治家たちが日本軍国主義者による中国侵略の歴史を否定する立場を堅持することが中国人民の感情を傷つけている。このような事態によって中国人が近代中日民間交流の成果を正確に認識することに対して悪い影響をもたらしてい

る。中日両国間の歴史問題について現在のところ徹底的に解決していないので敏感な問題として中国人の心に残っている筈である。このような問題はわれわれの調査にも大きな困難をもたらすことはほぼまちがいない。この困難を克服しなければプロジェクトを完成できるかどうか疑問である。調査を実施する前に十分に準備しなければならないと思う。

調査を進めるため、私は出発する前に現地における友人・知人に協力を依頼し、先に調査対象機関と連絡をとって調査を許可された上で調査を行った。これと同時に私はもとの勤め先である中国社会科学院アジア太平洋・日本研究所の紹介状を持って、公私両面のルートを通じて調査者と被調査機関との信頼関係を作ったことを報告しておきたい。残念ながら出張時間の制限により調査の期間は極めて短いので便宜をはかってもらえる調査ルートがあっても詳しく調査する余裕がなかった。また、調査費用の問題により調査の結果は充分でなかったこともつけ加えたい。

三 調査対象機関の選択について

この度の、調査の対象機関として中国沿海地域における大連市図書館と檔案館、瀋陽市における遼寧省図書館、檔案館、博物館、青島市図書館と檔案館などがある。それらの機関の所在地は、古い時代に日本軍国主義者に占領された都会であるので日本政府に支配された時代に数多くの日本人が暮らしたことがあり日本国内からたくさんの日本関係典籍と文化財がそこに持ち出されて今日に至っている。それと同時に日本政府により、官庁の役人が派遣され、支配者として現地の政府機関に勤務した際、数多くの政府文書檔案を作ったことがある。1945年第二次世界大戦が終わるときに敗戦の国として占領期に形成した多数の檔案資料を焼いてしまったという事実がある。現在、各地の檔案館に保存している檔案資料はわずかに残っている少数の檔案資料である。それにしても今回の調査の結果、大連、瀋陽を中心としての臨海大都市の図書館、檔案館と博物館においてやはり日本関係文献資料を伝存していることがあきらかになった。しかも半世紀を経て、ある部分の文献資料がそのまま手つかずの状態であったといわれる。

偶然の機会到北京の睿雅軒文化芸術公司において3万点以上の日本芸術品を保存していることに気がついた。誰もがその実物をみて皆驚いた顔をした。そのたくさんの骨董は全部が鑑別されていない状態なので本物か偽物か、まだはっきりしない。もし専門家の鑑別を通して半分位が本物であると判明すれば1万5千点の骨董を所有していることになりおどろきである。500年来、数多くの日本芸術品が中国に流出したことは中日両国人民が大規模な文化交流を行ったことの裏付けである。

四 調査のプロセスと所見

去年8月に上述の四つの大都市における八箇所の調査対象機関を調査した。その調査のプロセスと所見は次の通りである。

1. 大連市図書館日本文献資料館

大連市は1894年日清戦争の戦場の一つであったが、日清戦後はロシアの租借地になった。1904年日露戦後の大連はロシアから日本に譲渡され40年間にわたって日本の植民地になった。これを背景にして大連には多くの日本関係典籍が流入した。1906年「満鉄」が成立してから満鉄調査部が全中国の社会各分野の状況を詳しく調査して「満鉄調査資料」を形成した。この資料は日本政府が大陸政策を推進する重要な根拠になっただけでなく、同時に中国近現代の社会状況の記録としての価値が注目されている。

上述の歴史的要因によって大連図書館は全中国で所蔵している日本語版図書資料が一番多い図書館であるといわれている。そこに山積する日本語版図書資料は主に昔の満鉄大連図書館のものである。旧満鉄大連図書館は事実日露戦争の後に日本が中国において創立した最大の文献情報センターであるといえよう。そこに所蔵されている文献資料は長い間整理されなかったので利用することも難しい。中国が改革開放政策を実行してから中国の学術研究が徐々に活発化するに伴い大連図書館の日本語文献資料が一部分整理されながら利用されはじめたようである。

中国「文革」前の1965年に成立したばかりの遼寧省日本研究所の若い研究者たちはかつて大連図書館で整理した結果、厚い2冊の日本語書籍の目録を作ったが、それは所蔵のわずか一部でしかないのである。「文革」のショックによって整理の仕事は中止しなければならなかった。

近年、中国の文化教育事業と社会科学研究事業は急速な発展を遂げており、外国語の資料を利用することが急増しているので、大連図書館の日文図書資料の発掘利用も重視されている。したがって、当図書館は2000年1月に日本文献資料館を開設した。当資料館の古い建物も修復されきれいになった。

大連図書館の日本文献資料館の責任者である韓俊英主任の紹介によると、満鉄大連図書館所蔵の日本語図書資料は9.4万種以上に上り、18万冊弱になっている。その中には雑誌1900種類以上、2200冊余り、新聞紙100種類以上がある。これらの図書資料のうち3000点余りの資料が明治期と明治以前の珍しい資料である。満鉄大連図書館所蔵の日本語版図書資料は主に日本国内の出版物であるが、中に植民地の台湾、朝鮮からの出版物及び日本の中国駐在機関の出版物も含まれている。その蔵書の内容はM書庫と関内書庫に分類されている。M書庫は満蒙文庫、東南アジア文庫、極東（ソ連）文庫及びユダヤ文庫に分類されている。そのユダヤ文庫においてユダヤ文と欧文の図書資料を保存していた目的は日本が「満州」地方で人種改良という計画を実施する準備のためである。

現在、大連図書館の日本文献資料館所蔵の日本問題研究に関する文献資料は2.8万種類あり、中には政治類が3000余種、社会類1500余種、文化類1300余種、芸術類1200余種、文学類8800余種、歴史類1000余種、教育類1600余種、その他に経済、軍事、叢書類などもある。『古事記』『日本書紀』『万葉集』等古典書籍には多種類の版本がある。そのほか、『大日本帝国議会志』『大日本史料』などの貴重な文献資料もきちんと並べられている。このような文献資料の史料価値はきわめて高く、十分に利用されていないので、

学者たちの中ではこの状況を改善する要求が強くなっている。

大連は中国東北の「門戸」であるだけでなく、同時に京津及び中国国家の「門戸」である。地理的には日本に近く、歴史的には、日本に支配された植民地であった大連は現在、中日両国の間の経済貿易を交流する窓口として重要な役割を果たしている大都市である。しかし、大連図書館に保存されている多くの日本語文献資料が依然としてここに眠っているのはとても残念なことである。これから両国の関係部門の間で協力し、共同開発することが両国文化交流の一つの課題となるべきである。

2. 大連市檔案館の関東州檔案

1905年から日本は大連を植民地として連続して40年の支配を行った。大連は重要な戦略的地位を持っているので、常に日本の海外勢力を拡大する中心拠点であった。日本政府は大連に関東都督府、関東庁、関東州庁、関東軍司令部、南滿鐵道株式会社などの植民統治の機関をつぎつぎに設立した。これらの機関を通じた、中国滿蒙地区と関内の日軍に占領された地域を支配するための、日本政府の方針、政策、法律、条令などの公文書や民間の私文書、あるいは、これらの機関で形成された文書は1945年8月の敗戦で日本人が帰国する際に、上部の命令によりそのほとんどが焼かれてしまった。その際、連日近所の住民に見られた焚書の場面がいまでもある老人の頭の中に残っているようだ。

現在、大連市檔案館が保存している4000点位の檔案資料は大部分の文書を焼いてなお残っている小さな部分のものであって、焼いた文書のわずか一部でしかないものである。その中の少数の檔案資料は日本から大連に持ちこんだものだが、多数は現地で作ったものである。

3. 遼寧省図書館特蔵部

瀋陽市は昔から今日までずっと中国東北の政治経済の中心地であって、中国滿族と滿族文化の最初に興った地元である。清末、日露両国勢力は瀋陽で争っていた。瀋陽を支配すれば滿州全域を支配することが可能になる。最初にロシアは長春から大連までの東清鐵道を敷設し、経営する権利を手に入れたが、日露戦争の結果、日本が勝利をかちとった。それと同時に瀋陽を中心とする東清鐵道沿線及び東北三省は事実上日本の勢力圏になった。日本人はその鐵道を経営し、鐵道を保護する名義で鐵道沿線の駐兵権を手にした。その後、日本人は清政府からいろいろの特権を取得した上で、滿族の故郷である瀋陽で政治、経済、軍事、文化などの分野に全面的に滲透した。清末から民国にかけて瀋陽と日本との間には密接な関係があったので日本の書籍と美術品などが日本国内から続々瀋陽に流出した。民国時代から「滿州国」時代まで瀋陽は徐々に日本の植民地におちたわけで、さらに多くの日本文書と書籍が瀋陽に流入したが、日本語資料のかなり多くが1945年終戦後は瀋陽における遼寧省図書館に保存されている。

遼寧省図書館特蔵部を担当する劉竟さんによると、1945年から1948年まで東北人民解放軍により、北の佳木斯から西の山海関まで、南の三十里堡までの広範な範囲で収集された日本語版の書籍、文献、雑誌、新聞紙など10万種類以上のものを遼寧図書館に集めたという。そ

の結果日本語資料と図書は13,000種以上に達した。

日本語版の重要文献について、例えば「書道全集」（昭和6年10月、平凡社出版、下中弥三郎編）「日本絵巻物集成」（昭和4年9月、雄山閣出版、長坂金雄編）「日本画大成」（昭和6年11月、東方書院出版）「浮世絵大成」（昭和6年2月、東方書院出版）「良寛遺墨集」（昭和3年11月、第一書房出版）「吉田松陰遺墨帖」（昭和16年7月、岩波書店出版）など300種以上の貴重なものがある。これらの文献は主に日本の明治後期、大正、昭和前期の出版物である。この時期は日本政府は中国に対する大陸政策の準備、制定と実施の時期であった。その大陸政策の前期の目標は満州を先に征服してから中国全土を征服する計画であった。従ってその時期に日本から瀋陽に流出した文献は日清戦争、日露戦争など戦史類の書籍がかなり多く見られる。遼寧省図書館特蔵部に収蔵している日本語版の文献資料を見ると、中国東北地方における中、露、日三国の近現代国際関係の歴史がよく見えると思う。

4. 遼寧省檔案館とその日文資料目録

瀋陽における遼寧省檔案館は全中国でも有数の省クラスの檔案館である。前述のように瀋陽市は東北地方の政治経済の中心であるので、遼寧省檔案館が保存している檔案文献資料は実際は東北全土の檔案資料を含んでいる。同館が収蔵している檔案資料には清時代、民国時代、即ち軍閥張作霖の時期及び「満州国」時代のものがある。文字の種類は満文、漢文、日本語文などがある。満文老檔も収蔵している。

当檔案館が収蔵する142万巻にはすくなくとも3万巻以上の日本語版の日本関係の檔案資料があるようだ。1995年10月、日本万国博覧会記念協会の助成により、館内に収蔵している日本語の檔案資料を整理して上、下2冊の『遼寧省檔案館蔵日文資料目録』（以下「目録」と称する）を編集し、出版したが、それらは主として満鉄と「満州国」の檔案資料である。その「目録」を見ると当館に収蔵している日本語檔案資料の実態があきらかになる。もちろんこれらの檔案資料には日本から持ち込んだ檔案資料と現地で作った檔案資料により構成する檔案資料の方が多数を占める。この「目録」は単行本、叢書、刷り物、統計資料などの部分に分け、各部分は皆、檔案資料を作成した機関により排列している。上巻はすべて満鉄機関により形成された資料である。下巻は中国東北地区、中国其他地区、朝鮮、日本など四つの部分に分類した。各部分の資料は行政機関、社会団体、会社に分けて排列している。遼寧省檔案館の檔案資料編集部の担当者によると、「目録」に編入された日本語檔案資料は一部分のものであって、まだ編入していないものもある。更に整理を進め、編纂する必要があるといわれた。同檔案館に収蔵している檔案資料を近現代中日関係の歴史を研究する裏付けとして充分に利用すれば、科学的な研究成果が生み出されるであろう。その重要な史料の価値が今後どれだけ関係者に重視されるであろうか。

5. 遼寧省博物館と日本の絵巻

遼寧省博物館は遼寧省だけでなく中国東北地方の最大の博物館だといえる。歴史的要因により館蔵している文物は日本と関係があるものが多い。同博物館の専門家によると、日本人

により作成された書道、絵など300点以上の珍品があるそうだ。そのほか、日本語版の考古学文献資料をも保存している。これらの文献資料を見ると、日本の考古学者が中国の満蒙地域において古代遺蹟を発掘し、これを考古文献に編集したものが多い。日露戦争以来、中国東北地区考古事業に関心を寄せる日本の学者がだんだんふえるようになった。日本の学者の研究と同じ時代に日本政府が推進した満蒙拡張政策との間にどういう関係があるのか、という問題を研究課題として探求する必要があると思う。

6. 北京睿雅軒文化芸術会社の日本宝物

偶然のチャンスで北京の睿雅軒文化芸術会社を見学した。睿雅軒主人である王雪さんによると、20年前から彼は中国各地の民間から日本の芸術品を収集してこれまで日本の絵（約1万点）及びほかの芸術品などあわせて3万点以上のものを収蔵しているという。専門家によると、中国各地に散布している日本の芸術品はすくなくとも6万点以上があると推測できる。その中半分が睿雅軒に収蔵されている。その蔵品の創作年代別については10世紀の末期から1945年の日本の敗戦まで、つまり平安時代から昭和時代前期まで約1000年間の歴史に亘ってそれぞれ違う時期の作品が揃っている。

これらの芸術作品は日本歴史の各時代の数千人に及ぶ作者により創作されたものである。その中には、有名な芸術家である雪舟、秋月、狩野正信、狩野安信、土佐光起、曾我二直庵、尾形光琳、池大雅、与謝蕪村、圓山応挙、浦上玉堂、伊藤若冲、酒井若一、谷文晁、青木木米、頼山陽、渡辺華山、鈴木春信、喜多川歌麿、葛飾北斎、歌川広重、狩野芳崖、富岡鉄斎、横山大観、竹内栖鳳、橋本関雪、鏑木清方などが含まれている。

睿雅軒に収蔵されている宝物は関係専門家によると数百点の珍品が日本の国宝クラスのものであるといわれ、例えば日本の天皇が乃木希典大将に、張作霖大元帥に贈った花瓶などがある。

睿雅軒に収蔵されている日本芸術品の一部分を見ておどろいた。深い印象が頭の中に残っている。

(1) 中国の歴史と比較して日本の歴史はかなり短い、天才ともいえる優秀な日本の歴代芸術家らは優れた芸術品を生み出し大和民族は高い文化レベルを有する偉大な民族であることが、裏付けられたと思う。

(2) 中国人は古来、芸術品を大変愛する民族であることは世の中に知られている。本国のものばかりでなく、外国のものをも好み、沢山の日本芸術品が中国に流入し、中国人によって保存されている。

(3) 中日両国は二千年の友好の歴史があったが、近代には日本軍国主義が中国を侵略したことにより、不幸な時代もあった。両国の戦争の時代と中国の文革時代にも中国人が慎重に日本芸術品を保存しているのは民間に依然として友好関係を維持しようという願いがあることの裏付けになっている。

睿雅軒を訪問する際、中国芸術研究院教授である劉曉路さんが、睿雅軒の学術委員会主任として、睿雅軒を中心に中国に秘蔵されている日本芸術品について紹介してくれた。本「報告

集」に彼の論文が発表されるべきだが、残念ながら急逝されたため、論文がみられないので、彼が紹介した内容を、次に記したい。

1) 最初の収蔵者

中国所在の日本芸術品は全部、1945年、日本が中国に敗戦した時から残されてきたものだが、その最初の収蔵者は主に次のとおりである。

- (1) 江戸幕府・近代天皇・清朝皇宮。例えば、明治天皇、宣統皇帝、陳宝箴太師。
- (2) 北洋軍政府と東北軍首領。例えば、張作霖大元帥、張学良海陸空副総司令。
- (3) 偽満州国政府。例えば、康德皇帝、鄭孝胥総理大臣。
- (4) 偽汪精衛政府。例えば、周仏海。
- (5) 旧在中国日本将軍・会社・文化人。例えば、乃木希典大将、満鉄、渡辺晨敏。
- (6) 旧中国著名文化人。例えば、羅振玉、陳師曾、呉昌碩

2) 収蔵品の分類

80年代まで、蔵品の単位別でいえば、遼寧省博物館・旅順博物館・北京市芸術博物館は質量ともに上位にある。その次は吉林省博物館・黒竜江省博物館・天津市芸術博物館・炎黄芸術館・榮宝齋・故宮博物院、および東北・華北・華東の幾つかの文化財専売店などである。またプロレタリア文化大革命の時、多数の日本画が紅衛兵に取り上げられたが、以後公安部に秘蔵され、公安部だけで1000点以上にも達したそうである。

博物館と文化財専売店による収蔵数は中国所在日本画の約30%を占めているが、他の70%は約3000人の個人の手に残り、その数量は1点から300点余りまで様でないと考えられる。

蔵品の地区別から見れば、全国ではチベット以外の省市区の全てに日本画が秘蔵されている。とくに東北地域には一番多く、約50%を占め、なかでも、沈陽・大連・丹東・長春・ハルビンなど5つの都市にもっとも集中するところである。華北地域がその次で、約30%を占め、北京・天津に集中し、そして石家荘と太原である。他の地域は合わせて20%を占め、済南・青島・上海に多く保存されている。

しかし、1999年から現在まで、1万点以上の日本画を含む3万点以上の日本芸術品は北京睿雅軒に収集され、全体の50%を占めるという。

蔵品の年代別から考えれば、それら日本芸術品の創作年代は10世紀の末期に始まり、1945年、日本の敗戦に終わる。すなわち日本の平安時代・鎌倉時代・室町時代・桃山時代・江戸時代・明治時期・大正時期・昭和前期に渡る。収蔵年代は中国の明・清・民国・共和国などの四つの時代を経験した。最初の作品は今からおよそ1000年前である。

3) 収蔵品の特色

中国に収蔵された日本画は、500年以來の日本画の全貌を反映するものではなく、次のように中国との関係が密接な幾つかの流派に選択的に集中する。

- (1) 雪舟を始めとする漢画派
- (2) 応挙と呉春を始めとする円山四条派

- (3) 大雅と蕪村から鉄斎までの文人画
- (4) 芳崖そして大観を始めとする新日本画運動
- (5) 栖鳳を始めとする京都画派
- (6) 浮世絵

そうすると、最初の収蔵者の趣味が見える。

また、欧米の日本画の収蔵を中国のそれと比べると、それぞれ次のような特徴をもっていると言える。

- (1) 欧米の収蔵は浮世絵が、中国のそれは水墨画が多いのである。
- (2) 欧米の収蔵品は障壁画が、中国のそれは巻軸画が多いのである。
- (3) 欧米の収蔵品は版画が、中国のそれは肉筆画が多いのである。
- (4) 欧米の収蔵品は博物館が、中国のそれは個人が主である。

1945年まで、中国を訪問した日本の芸術家は、ほとんど中国人の愛好によって、中国の筆・墨・紙・絹などの材料を使用し、中国的な風格を求め、中国式な表装をとっているから、彼等が日本で創作した作品とはちょっと違っている。つまり、中国に収蔵された日本芸術品は強く中国に親近する情緒を持っていると言える。

4) 中国は世界一の日本芸術品の収蔵国

ところで、日本との関係が一番密接な中国では、収蔵されている水墨画は質量ともに欧米のそれを越えたと考える。例えば、アメリカで日本芸術品が一番多く収蔵されているニューヨークのメトロポリタン美術館では458点しかないが、中国の睿雅軒・遼寧省博物館・旅順博物館・北京市芸術博物館では全てこの数字を越える。

ロシアのエルミタージュ国立美術館とプーシキン国立美術館の日本芸術品蔵品はかつて一番多かったと言われる。そのなかでエルミタージュ国立美術館には1万件以上もあるそうだが、中国の場合は睿雅軒だけで3万件以上持っている。しかも、エルミタージュ国立美術館のそれらは主に浮世絵版画だが、肉筆絵といえ、質量的に中国ほどよくはない。特に日本芸術品が多数中国民間に散在していることは欧米の追従できないところである。つまり日本の肉筆絵の収蔵において、中国は日本に次ぐ国だと考える。これは多数の蔵品によって証明できるばかりでなく、中日美術交流に常識のある人なら、このような特殊な文化現象に驚くことはなからうと思う。

つまり、中国は世界一の日本芸術品の収蔵国で、睿雅軒は世界一の日本芸術品の収蔵地だと言える。

2000年以上の中日文化交流の歴史をもっているから、日本以外で、中国ほど自国に収蔵された日本芸術品を重要視する国はないと考える。中国はそれを世界人類の共同文化遺産として保存している。

7. 青島市の図書館と檔案館

青島市は第一次世界大戦前はドイツの租借地であったが、戦後日本の占領地になった。つ

まり1945年まで、青島は外国の勢力範囲が、ドイツから日本に代った歴史があったので、独、日両国の歴史的影響を受けた。両国の図書檔案資料が残っている。地理的には青島は沿海の重要な港で中国対外交流の扉である。特に日本との距離は短く、日本軍国主義者の標的になったのはいうまでもない。

上述の背景により、青島市の図書館に収蔵されている日本語版の図書資料は223万点があり、満鉄資料は300点があるといわれた。図書の中で政治、経済、軍事、外交を除いて戦争の場面を反映する美術集もある。その本の色彩はそのまま変わっていない。それらの書物は日本から持ち込んだものが多く、現地で作ったものは少ない。

青島市檔案館に収蔵されている日文檔案文書は3,000点以上のものがある。その内容はほとんど日本人が青島占領以後、青島を支配した際の市政経営、港務局業務などの檔案資料である。

8. 旧北京日本大使館の檔案資料

古い時代の北京に駐在した日本大使館の一部の檔案資料はいま中国社会科学院経済研究所の図書館に秘蔵されている。当図書館の責任者によると、これらの旧日本大使館の日本語檔案資料は数万点であるといわれる。その内容は経済調査資料を中心とし、そのほかの檔案もある。長期間にわたってこれらの檔案はある程度整理されたが一度も公開しなかったという。中国社会科学院内部も公開利用されなかった。私は案内者され檔案室に入って、大きい部屋にぎっしり並んでいる本棚に檔案資料がきちんと排列されている様子を見た。これらの檔案資料は厳しく管理しているようで特別の許可がないかぎり誰も見られないという。

五 いくつかの体験と考え方

日本から中国に流出していた日本関係典章と文化財を調査する場所としては大連、瀋陽、北京など三箇所を重点としなければならないと思う。特にその三地の大連図書館、旅順博物館、遼寧省図書館、遼寧省檔案館、遼寧省博物館、北京故宮博物院、国家図書館、北京芸術博物館、睿雅軒、中国社会科学院経済研究所図書館などの代表的な機関を詳しく調査する必要がある。

中日間の不幸な歴史問題があるので、昔日本人により残された日本の典籍などは中国各地の政府が厳しく管理している。日本側が中国に残された日本のものを調査したいと思うのは理解できないわけではないが、中国側の協力を得なければ調査はできないと思う。この問題を解決するためには、先の連絡を通して中国関係機関に調査計画書、説明書などを提出すると同時に、調査の理由を十分に説明した上で、相手の協力を得る必要がある。特に調査を通して、両方の間に業務の協力と学術の交流関係を作れば、順調に調査を進められるようになるだろう。

いま中国に保存されている日本の典籍と文化財は、中日両国人民による長期にわたる交流のシンボルとして存在しているものである。これらの貴重なものは両国の関係機関と関係学

者の間でまじめに協力し、合作して、その山のような宝物を開発整理し、共通に利用すれば両国の文化事業の発展と交流を促進するばかりでなく、両国の友好関係に、両国人民の世代々、子々孫々の友好に大きな貢献をすることになるであろう。

〈調査箇所の資料例〉

大連図書館

「支那史研究」、「歴史上より見たる日本と満州」、「日満の古代国交」、「東洋史上における満鮮の位置」、「前満州の開国と日本」、「列強対満工作史」(上、下)、「満蒙太平記」、「満鮮地理歴史研究報告」(1～16巻)、「満鮮関係史考」、「アジア問題講座」、「満州発達史」、「近代蒙古史研究」、「日清日露の役」、「日清戦争始末」(全)、「日露大戦秘史」(名将回顧)、「満州軍内戦史」、「満州事変」、「満州事変秘史」、「ノモンハン事件の真相」、「日満経済関係の新意義」、「日満統制経済論」、「満州帝国総覧」、「大陸政策論」、「日満連邦主義」、「大陸開拓」など。

- 《満洲概観》(日) 満鉄总裁室弘報課 大連 昭和十六年(1941年)
《关东州事情》(日) 关东厅临时土地調査部編 満蒙文化協会 大正十二年(1923年)
《大连商工名录》(日) 篠崎嘉郎 大连商工会议所 昭和七年(1932年)
《关东州土地調査事業報告書》(日) 关东厅临时土地調査部 旅順 大正十二年(1923年)
《資料汇报》(日) 満鉄調査部 昭和十七年(1942年)
《満鉄調査部概要》(日) 満鉄調査部 昭和十七年(1942年)
《南満洲鉄道株式会社三十年略史》(日) 松本丰三 満鉄 昭和十二年(1937年)
《南満洲鉄道株式会社土木十六年史及附图》(日) 満鉄土木課 大正十五年(1926年)
《調査部新入社員執務便覧》(日) 満鉄調査部 昭和十四年(1939年)
《南満洲鉄道株式会社二十年略史》(日) 満鉄調査課 大連 昭和二年(1927年)
《満鉄读本》(日) 経済事情社 昭和十四年(1939年)
《乃木将军》(日) 西村材助 東洋出版社 大正元年(1912年)
《大将乃木》(日) 横山健堂 東京敬文社 大正二年(1913年)
《雪斎金子平吉先生遺芳録》(日) 振東学社 大連 昭和十三年(1938年)
《烈士钟崎三郎》(日) 納戸鹿之助 青木頒布会 昭和十三年(1938年)
《乃木夫人言行録》(日) 平田方村 乃木夫人言行録編纂所 大正四年(1915年)
《乃木希典小話》(日) 菊池又佑 東京 昭和十三年(1938年)
《乃木将军》(日) 木村毅 東京 千倉書房 昭和十二年(1937年)
《乃木静子夫人》(日) 岸哲夫 東京 春陽堂 昭和十五年(1940年)

- 《乃木希典》(日) 宿利重一 东京 春秋社 昭和十六年(1941年)
- 《乃木希典》(日) 山中峰太郎 东京大日本雄辩讲谈社
- 《川岛浪速翁》(日) 会田勉 东京文粹阁 昭和十一年(1936年)
- 《日清战争史实记》(日) 大桥新太郎 东京博文馆 明治二十七至二十八年(1894—1895年)
- 《世界地理风俗大系》(日) 仲摩照久 东京新光社 昭和三至七年(1928—1932年)
- 《日露战史》(日) 参谋本部 东京 明治四十五年至大正三年(1912—1914年)
- 《明治三十七八年海战史》(日) 海军司令部 东京水交社 昭和九年(1934年)
- 《大连的二十年》(日) 竹内坦道 大连 大正十四年(1925年)
- 《厅势一斑》(日) 关东厅长官官房文书课 昭和二年(1927年)
- 《大连市》(日) 高桥勇入 大陆出版社 昭和五年(1930年)
- 《大连要览》(日) 傅立鱼 大连 泰东日报社 大正七年(1918年)
- 《现在的满洲》(日) 上田恭辅 大正十年(1921年)
- 《大连都市计划概要》(日) 关东州厅土木课 昭和十二年(1937年)
- 《大连港案内》(日) 满铁旅客课 昭和十三年(1938年)
- 《大连海务协会二十年史》(日) 大连海务协会 昭和五年(1930年)
- 《大连开业二十年联合祝贺会纪念志》(日) 辽东新报社 大正十三年(1924年)
- 《大连埠头局作业概况》(日) 大连埠头局 昭和十六年(1941年)
- 《日露战役写真帖》(日) 大本营写真班 东京 明治三十七年(1904年)
- 《大连建值问题》(日) 满铁社长室调查课 大正十一年(1922年)
- 《大连筑港计划案附属图》(日) 内田富吉 满铁 明治四十二年(1909年)
- 《露舰队最期实记》(日) 时事新报社 东京秀光社 明治四十年(1907年)
- 《最近的南满洲》(日) 保科纪十二 大正十四年(1925年)
- 《现满洲》(日) 辽东新报社 大正元年(1912年)
- 《大连市催满洲大博览会》(日) 伊佐寿编 协赞会选 昭和八年(1933年)
- 《满洲野球大鉴》(日) 满洲写真通信社 大正十一年(1922年)
- 《大连汽船株式会社二十年略史》(日) 大连汽船会社庶务课 昭和十年(1935年)
- 《大连番地入案内》(日) 成富男编 大陆出版社 昭和十九年(1944年)
- 《大连市案内》(日) 大陆出版社 昭和十六年(1941年)
- 《大连市町名地番入市街全图》(日) 大连文英堂 大正十六年(1927年)
- 《南山激战史》(日) 关山胜三 昭和七年(1932年)
- 《回顾八十年史》(日) 大泽米造 东洋文化协会 昭和八、九年(1933—34年)
- 《大连竞马俱乐部设立十年志》(日) 穗十一郎 大连竞马俱乐部 昭和十年(1935年)

《日本写真年鉴》(日) 金洋成兵卫 朝日新闻社 大正十四年至昭和十四年(1925—1939年)

《创业五周年》(日) 满洲电信电话株式会社 昭和十四年(1939年)

《关东厅要览》(日) 关东厅长官官房调查课编 昭和三年至十六年(1928—1941年)

《日露战争实记》(日) 博文馆(第一编至第二十二编) 明治三十七年(1904年)

大連檔案館

“九・三”前振興会等社团组织資料、64頁

日本関東州民政署收発登記(一、二、三、四)、共计162件

日僑労働組合材料及個人材料、43件

日本関東庁1905~1945、計71卷

関于中国政治、经济、文教の調査報告、69件

東方会議、経過及報告、148件

満州国を成立する政治、経済、軍事、情報、宣伝などについての記事、229件

“九一八”事变後に日本は中国東北に対政、経を調査する、56頁

満州国建国大要

日本青年将校血盟団資料、45頁

「米国極東政策の経済基礎」、日本国際協会、1939

「書道全集」全25巻、平凡社、1931年版

など

遼寧省図書館

「隠れたる事実日露大戦秘史」加藤清司著 東京 一心社

「満州上海事变全記」朝日新聞社編 東京 昭和17年

「後藤新平伯と満州歴史調査部」稲葉君山著 大連 満鉄 昭和14年

「東田先覚志士記伝」(上、中、下) 茵生能久著 東京 黒竜会

「満州家庭宝典」元本昭五郎著 大連 昭和4年

「米国人の観たる満州問題」新渡戸稻造編 東京 日本評論社 1929

「日支交渉史研究」秋山兼蔵著 東京 岩波書店 1939

田 桓

「滿州帝國中華民国治外法權關係條約集」岩松堂書店大連支店編、1931

「滿蒙特殊權益論」信夫淳平著 東京 日本評論社 1932

「リットン報告全文」朝日新聞社編 東京 1932

《書道全集》昭和六年十月平凡社發行 下中弥三郎編輯

《日本繪卷物集成》昭和四年九月 雄山閣發行 長坂金雄編輯

《日本畫大成》昭和六年十一月 東方書院編輯發行

《浮世繪大成》昭和六年二月 東方書院編輯發行

《良寬遺墨集》昭和三年十一月 第一書房發行

《吉田松蔭遺墨帖》昭和十六年七月 岩波書店發行

など

遼寧省檔案館藏日文資料目錄 上

滿 鐵

滿蒙ニ於ケル國家代用機關ト其運營現況 1906年6月 手稿

南滿洲鐵道株式會社ノ性質、關東都督府官吏ノ性質 1907年3月 27頁

乘車券及鐵道收入關係書類取扱手續及様式 1911年4月 118頁

朝鮮歷史地理 第一卷 津田左右吉 1913年11月 336, 21頁 圖6

南滿洲鐵道株式會社事業成績 1912年12月 131頁

支那政府濱黑鐵道借款契約 1916年3月 37頁

南滿東清旅客及貨物聯絡運輸第五回會議議定書 1916年4月 51頁

南滿洲鐵道株式會社事業概況 1918年5月 74頁

南滿洲鐵道沿線各地水道小誌 附同水道統計表 1918年9月

南滿洲鐵道株式會社十年史 1919年5月 955頁

南滿洲商工要覽 1919年10月 856頁

南滿洲鐵道株式會社事業概況 1919年12月 78頁

品名並數量稱呼鑑 附各國度量衡并貨幣比較 1920年5月 308, 17頁

大正九年十一月對支新借款團完成ニ關スル帝國政府ノ聲明 手稿

大連市油坊創生業及發展(1904年—1920年) 106頁 手稿

支那國有鐵路旅客運輸規則 1921年1月 57頁

支那國有鐵路貨物運輸規則及貨物等級表 1912年1月 62頁

- 鐵道省線聯絡旅客運賃並哩程表 1921年8月 108頁
- 南滿洲鐵道株式會社事業概況 1921年8月 100頁
- 滿洲大豆ノ研究 龜崗精二 1921年 160頁
- 日支聯絡運輸會議議定書及附屬書（第9、14） 1921年 77頁
- 第七回南滿東之聯絡運輸會議議定書 1922年6月 油印
- 長春、洮南、扶餘、大賚間鐵道線路預定、踏查平面、縱斷圖 附復命書、踏查報告書 1922年12月
- 鐵路運賃調表（大正十一年度） 一頁 秘
- 滿蒙諸鐵道 1923年2月 油印
- 遼陽工場ルーチングシステム 1923年10月 4頁 秘 油印
- 關東大震災寫真帖 1923年10月 147頁
- 日本の石油問題と撫順産油母頁岩の價值 1924年1月 29頁 秘
- 滿鐵旅客及荷物運送規則、運送取扱細則 1924年4月 218頁
- 洮南索倫間鐵道線路踏查報告書 附洮南突泉間 1924年6月
- 洮南索倫間鐵道線路地形踏查報告書、洮南突泉間線路説明 附興安屯墾區域圖、預定線路平、縱斷面圖 1924年6月 圖16
- 南滿洲鐵道旅行案内 1924年9月 301頁
- 最近に於ける北滿鐵道問題 1924年9月 46頁
- 貨物賃金表（滿洲線） 1924年11月 71頁
- 洮昂線鐵道線建造費見積書 1924年 秘 油印
- 貨物運價表 1925年7月 84頁
- 滿蒙農業開發策及本社之農業施設概要 1925年 42頁
- 滿鐵鐵道運送規程 1926年2月 29頁
- 貨物構内運搬及貨車入換規程 1926年3月 56頁
- 吉敦鐵路沿線調査、工程、車務、測量報告、調査録及平縱斷面圖（民國15年—16年）
- 帝國議會ニ對スル青島埠頭修築工事説明資料 1927年1月 油印
- 齊齊哈爾嫩江間鐵道線路踏查報告（大正15年12月—昭和2年6月） 縱斷面圖3 油印
- 滿鐵旅客及荷物運送規則運送取扱細則 1927年9月 274頁
- 京漢鐵道管理局ノ組織營業及給與規定 1927年 秘 油印
- 南滿洲鐵道株式會社第二次十年史 1928年7月 1352頁
- 京奉線營口站事情調査報告書 1928年8月 油印
- 昭和三年滿洲政治經濟事情 1929年6月 202頁
- 東支鐵道沿線の一隅より見たる現代支那の世相 1929年9月 29頁

- 吉敦沿線水田候補地調査報告書 附日本内地、朝鮮、臺灣產米増殖に関する方策（要約）
1929年9月 241, 61頁
- 滿蒙の産業 1929年11月 104頁
- 鐵路借款契約（光緒二十九年—民國十八年） 油印
- 滿蒙に於ける日支合辦事業 1930年3月 186頁
- 連洛線内貨物特定賃率表 1930年5月 44頁
- 貨物運賃及料金規則 附貨物特定運賃率表 1930年7月 60頁
- 中華民國民法對譯 1930年9月 294頁
- 鐵道借款關係資料 1930年 油印
- 在滿鮮人學校調（昭和五年度） 37頁
- 東北鐵道政策概要 1930年 油印
- 關係會社書類目錄 1930年 油印
- 鐵嶺附屬地沿革史（大正15年—昭和5年） 1930年 97頁 油印

遼寧省檔案館藏日文資料目錄 下

中國東北地區

偽滿洲國執政府

執政府職員錄 1933年9月 14頁

中央委員會

建國一年回顧錄 1933年3月1日 80頁

建國周年紀念畫報 附熱河征戰與國都建設 1933年3月1日

資政局弘報處

滿洲國建國小史 1932年6月 81頁

監察院

監察制度考察 1935年7月 152頁

立法院

立法院速記員養成所同學錄 22頁

明仁鑑 修改版 趙欣伯著 1933年3月 58頁

滿洲國成立の經緯と其國家機構に就て 趙欣伯等著 119頁

最高檢察廳

滿洲制裁法規 1937年6月

奉天高等檢察廳館内事務一覽 24頁

滿洲國司法警察執務要綱 檢察官國分友治 1938年6月 329, 69頁

奉天第一監獄大同二年報告書 162頁

滿洲國政府

鐵道, 港灣, 河川ノ委託經營並新設等ニ關スル協定 1932年4月19日

西松花江, 嫩江江圖 附第二松花江江圖滿洲國政府委託日本海軍測量 1933年

郵政機關數 1934年12月 打字

石炭 1939年10月 油印

第三回滿鮮連絡協議會議事錄 滿洲帝國政府 朝鮮總督府合編 1942年10月 油印

滿洲華北交易會議議事錄 康德12年度 1945年 16頁 油印

滿洲經濟統制策 259頁

國務院

施政綱要 1934年3月 44頁

工業生產品分類表(工業調査用) 附指定原料及材料表 指定機械及設備表 1935年12月 200頁

滿洲國王道の片鱗 鄭孝胥著 1936年1月 108頁

第二次臨時人口調査須知 1936年 65頁

資源調査法 1937年12月 油印

康德四年度總預算 218頁

康德四年度一般會計追加預算(第二號) 康德四年度各特別會計追加預算(第三號)

康德四年度一般會計歲入歲出預算中所管變更之件 68件

康德四年度各特別會計預算 103頁

康德四年度預算 496頁

康德四年度歲入歲出總決算 康德四年度各特別會計決算 502頁

康德五年度總預算 225頁

康德五年度各特別會計預算 126頁

康德六年度各特別會計預算 146頁

總務廳所管康德六年度國債金特別會計歲入歲出預算各目明細書 國務院總務廳 治

安部合編 8頁

總務廳所管康德六年度需品特別會計歲入歲出預算各目明細書 37頁

總務廳所管康德六年度臨時國都建設局特別會計歲入歲出預算各目明細書 28頁

- 總務廳所管康德六年度科學試驗事業特別會計歲入歲出預算各目明細書 100 頁
總務廳所管康德六年度政府職員共濟特別會計歲入歲出預算各目明細書 12 頁
總務廳所管康德六年度恩給特別會計歲入歲出預算各目明細書 11 頁
總務廳所管康德六年度地方財政調整資金特別會計歲入歲出預算各目明細書 6 頁
康德七年度總預算 294 頁 秘
帝室費總務廳所管康德七年度一般會計歲入歲出預算各目明細書 365 頁
各特別會計預算 康德七年度 196 頁
康德八年度總預算 253 頁
帝室費總務廳所管康德八年度一般會計歲入歲出預算各目明細書 287 頁
康德八年度各特別會計預算 197 頁
康德九年度總預算 270 頁 秘
康德九年度各特別會計預算 186 頁
預算說明書 康德十年度 秘 油印
康德十年度一般會計歲入歲出預算中所管變更之件 第一號 47 頁
總務廳所管康德十年度各特別會計歲入歲出預算各目明細書 38 頁 秘
預算以外國庫負擔之契約 10 頁
歲出關係參考表 38 頁 油印
大滿洲國建設錄 附滿洲國全法令輯覽 駒井德三 1933 年 2 月 484 頁
皇帝陛下御訪日ニ關スル記錄（詔勅、訓示、謹話、挨拶等） 1935 年 5 月 33, 45 頁
日滿條約關係資料（治外法權撤廢等ニ關スル） 1936 年 6 月 170 頁
中央行政機構分析 1937 年 5 月 16 頁 油印
政務概況 1937 年 5 月 108 頁 油印
日支事變對策（星野總務廳長官案） 1937 年 9 月 91 頁 特秘 油印
電報略號書（一般用語之部） 1937 年 12 月

日 本

内閣	180
宮内省	182
外務省	183
内務省	189
大藏省	191
陸軍省	192
海軍省	193
軍令部	195
参謀本部	195
教育總監部	200
司法省	200
文部省	200
農商務省	202
農林省	203
商工省	206
遞信省	208
鐵道省	210
運輸通信省	215
拓務省	215
厚生省	216
大東亞省	217
會計検査院	218
貴族院	218
衆議院	218
警視廳	218
樺太廳	218
南洋廳	218
北海道廳	218
東京府	221

遼寧省博物館

日 文 部 分

(一) 綜 述

- 辽东半岛 鸟居龙藏 《太阳》2卷6、14、15期 1896年
- 开原怀古 松井等 《历史地理》11卷1期 1908年
- 南满洲调查报告 鸟居龙藏 1910年 《鸟居龙藏全集》第10卷 1976年
- 南满洲 田中义男 1915年
- 满洲考古学旅行 大野云外 《民族与历史》6卷1期 1921年
- 满洲最古的民族文化 八木奘三郎 《调查事情》3卷11期(1923年)4卷1、2期(1924年)
- 从人类学及人种学上看东亚 鸟居龙藏 1924年
- 鲜满旅行杂记 清野谦次 《人类学杂志》40卷11期 1925年
- 东北亚搜访记 鸟居龙藏 1926年
- 东亚文明的始原 浜田耕作 《百济观音》1926年
- 辽东史话 岛田好 《满蒙》7卷6、7、8、9、11、12(1926年)、8卷2、3、5、10、11、12(1927年)
(细目: 1、南满的高丽城 2、薛仁贵的传说 3、望海塌城 4、千山历史 5、平辽总兵毛文龙之事迹 6、清代四王及其遗迹)
- 满洲旅行纪事片断 清野谦次 《民族》1卷5期 1926年
- 朝鲜考古巡礼 高桥健自 石田茂作 1927年
- 南满、北满 岛田贞彦 《历史与地理》20卷4、5、6期 1927年
- 满蒙探查 鸟居龙藏 1928年
- 满洲考古学 八木奘三郎 1928年
- 从西伯利亚到满蒙 鸟居龙藏 1929年
(细目: 1、鞍山之调查 2、鞍山苗圃墓群的发掘 3、千山和櫻桃园 4、千山的画像石 5、辽金时代的土城 6、明代古城)
- 从考古学上看东亚文明的黎明 浜田耕作 《历史与地理》22卷1、2、3期 1929年
- 满洲考古资料余话 梅本俊次 《满蒙》10卷5、6、7、8、9、11、12(1929年), 11卷1、2、3、4(1930年)
- 旅顺考古记行 清野谦次 《历史与地理》25卷2、3期 1930年

东亚考古学研究 浜田耕作 1930年

(细目: 1、旅顺刁家屯古坟 2、南满洲考古学之研究 3、旅顺刁家屯古坟调查补遗 4、辽阳附近壁画墓)

东亚文明之黎明 浜田耕作 1930年

满洲考古学概说 八木奘三郎 1930年

三十五年前的满洲人类学和考古学 鸟居龙藏 《东亚》3卷8期 1930年

满洲国五大遗迹 鸟居龙藏 《历史教育》A7卷2期 1932年

青島市图书馆

《日本海軍陸戰隊史》山口喜代松著

《大日本戰史》1—7卷 高柳光壽編

《海軍五十年史》佐藤市郎著

《山東の研究》影山卯一郎編

《戰爭史第七卷》伊藤政之助著

《世界國防の現勢》西垣新七等編

《支那事變從軍記蒐錄》1—3編 宮居康太郎編

《支那事變皇國之精華》長澤小輔編

《對支回顧錄 上下》對支功勞者傳記編纂會

《北支の羊毛》野中時雄編

《北支農業要覽》東亞問題研究會編

《支那經濟の見方》竹内文彬著

《北支の政情》姫野徳一執筆

《陸軍史談》金子容軒著

《滿支鐵道發達史: 利權と建設》吾孫子豊著

《陸軍五十年史》桑木崇明著

《山東日支人信用秘録》上元苏藏著

《山东案内》小島平八編

《山东と物産》足立孝著

《聖戰美術》陸軍省美術協會編

青島市檔案館

- 港政紀要 第三期 青島市港務局 1933.7 卷號：563
港政紀要 第四期 青島市港務局 1934.7 卷號：561
青島市港務行政年刊 青島市港務局 1934. 卷號：564
青島市港務行政年刊 青島市港務局 1934. 卷號：592
青島市港務行政年刊 青島市港務局 1935. 卷號：558
青島港務輯覽 青島市港務局 1933.6 卷號：1427
青島港と佐藤船長 青島市港務局 1934.11 卷號：880
青島埠頭金率 青島埠頭事務所 1936.3 卷號：1046
青島第三碼頭建設匯真帖 株式會社福昌公司 1936. 卷號：3333
青島市政要覽碼頭運輸編 碼頭運輸 1937. 卷號：1075
青島港貿易統計年報 青島日本商工會議所 1937. 卷號：873
(三) 1938—1945
青島市港務局規定類纂 日偽青島埠頭事務所 1938.5 卷號：882
青島埠頭統計年報 日偽青島埠頭株式會社 1938. 卷號：905
青島埠頭統計年報 日偽青島埠頭株式會社 1939. 卷號：906
青島埠頭統計年報 日偽青島埠頭株式會社 1940. 卷號：907
青島埠頭統計年報 日偽青島埠頭株式會社 1941. 卷號：908
青島港貿易統計年報 日偽青島日本商工會議所 1939. 卷號：874
青島埠頭統計月報 4卷7號 日偽青島埠頭株式會社 1940.7 卷號：898
青島埠頭統計月報 5卷9號 日偽青島埠頭株式會社 1942.9 卷號：899
青島埠頭統計月報 3卷11期 日偽埠頭株式會社 1940.11 卷號：987
青島埠頭統計月報 3卷12號 日偽埠頭株式會社 1940.12 卷號：897
青島埠頭統計月報 4卷2號 日偽埠頭株式會社 1941.2 卷號：896
青島埠頭統計月報 4卷4號 日偽埠頭株式會社 1941.4 卷號：895